

リポート

「北鎌倉・松ヶ岡文庫の空気感」を感じに ...  
東慶寺を訪れて

2019年3月21日(木) 提出  
英語道弟子課程 弟子・H.K.

2019年3月24日(日) 修正版再提出

2019年3月17日(日)、「北鎌倉・松ヶ岡文庫の空気感」を感じに、出掛けて参りました。当日の経験と感じたことをレポートにさせていただきます。

その日の予定は、早朝に決定しました。

前日、私は英語稽古にて、生井利幸先生からの耳学問において、前々日と翌日の弟子、S.M.さんにおける、純粋な行動をお伺いする機会をいただきました。「S.M.さんのように純粋になりなさい」と先生はお伝えくださっているのだ、と思い、私も学ぼうと、「次週の祝日にでもゆくりと行ってみようかな」と思っていました。

日曜日の早朝、弟子専用ウェブサイト「世界レベルへの道」を拝見すると、S.M.さんが贈られたチェーリングのお写真と、S.M.さんの行動、そして、「北鎌倉・松ヶ岡文庫の空気感」について、詳細に伝えられていました。

私には、先生が「行きなさい」と仰っているようにしか思えず、先生のお言葉が私の胸に飛び込んできたように感じ、「今日」だと思いました。それで、「来週にでも」とぼんやり考えていたことを「その日にしよう」と決めたのです。

その直後に、要らぬ自分が出てきました。「上辺だけ真似しても無意味、行って、それで？」と、あれこれ考える「私」です。が、即、断ち切りました。なぜなら、もう、不要な固定観念で構成された自分は要らないからです。生まれたばかりの赤ちゃんのような純粋無垢な心で、「ただ、その空気感を感じてみたい」と湧いてきた気持ちに対して、「行動しよう」と思いました。

さて、行く事を決めたわけですが、早朝の内に出発して、人が混まない内に到着しようと思うも、たくさん疑問が湧いてきました。

「どうやって行くのか？」です。電車で行けるのか、どこで降りるのが、車で行く所なのか。

3月17日付、世界レベルへの道「北鎌倉・松ヶ岡文庫の空気感」を再度、よく読み。(実際、何度も何度も、隅々まで読み。)  
「S.M.さんは東京駅とある。では電車で行けそうだが、でも北鎌倉ってどこだろう？ 私は新宿から行くのがいいのか？」

行き方でつまづくとは思いませんでした。

自宅には 世界地図がなく... 海の近くか 内陸か 特定できずです。

かの有名な鎌倉です。誰もが訪れたことのある地で、鎌倉を愛する人々もたくさんいる。あの鎌倉です。

しかし私は、小学校の修学旅行で行ったような、微かな記憶もなく、以降、数十年、鎌倉方面には行っていませんでした。現在の住まいから(東京から)南西の方面だろうという位で、どの路線の電車に乗るのかすら、全く検討が付きません。

仕方なく、図書館のオープンする時間まで待つしかない、と思いましたが、まだ数時間あり、もううずうずしてじっとしてられません。「世界に唯一の道」にて、その記述を読み、行き方を悩み、時間はとんとんと過ぎていました。では、先生に最寄り駅だけでもお伺いさせていただこう、と思い、お電話をしてみました。丁度、加筆がなされ、先生が今働かれているとわかり、再度お電話するも、おそらく電話は離れたところにあったのだと思ひます。結局、9時に図書館に行きました。

すると、「なーんだ!」と思う程、あという間におわかりました。先生が以前より度々書かれたり、又、口頭でも仰ったりした「北鎌倉」は駅名であるという事、東海道線一本で行けること、周囲には数々の有名なお寺があり、非常に多くの人々が訪れる場所であること、次の駅が鎌倉駅で、小学生時に行った大仏があることを知り、誰もが知っている所で、全く何も知らなかった自分が、恥ずかしくなりました。

図書館で見つけた地図から、「馬場に着いたら大きな大きな円覚寺、とは反対のほうにある」ということだけを入れました。それ以上の情報は不要なので見ないようにしました。(思えば、自宅でもインターネットはあっても、そのようなものは使いませんでした。会社から貸与されているスマートフォンも全く使いませんので、インターネットに依存している人からすると、不思議に思うことでしょう。)

東京駅からは1時間掛からずして到着し、その圧倒的な近さに驚きました。何時間もかかりそうと想像していた距離感が一気に縮まりました。

「北鎌倉」には、大きくて広い円覚寺があり、周囲には多くのお寺が点在していました。東慶寺は、周辺のお寺からすると小さいほうのようでした。看板もあり、迷わずに着きました。

到着すると、広くて大きなお寺でした。

東慶寺の山門を通り、いただいた小さな案内書を手にして  
境内に入りますと、広く、大きな森(山)がずーっと奥のほうまで  
続いていた。全然小さくなく、広くて大きなお寺でした。  
(本堂は小さい感じでしたので、境内が広いということ、でしょうか)

非常に多くの人々が訪れていたことには驚きました。  
小さなお子さんとお母さんの親子連れ、私の母くらいの年の女性のグループが  
2~3人、4~5人、10人くらいの団体もあり、若いOLさんたち、  
お父さんたちの組、お寺巡りをしているであろうグループもあれば、  
私のように一人で来ている人もいて、年代も性別も実に様々だったことも、  
私にとっては驚きでした。

そういえば、山門の下に着いた際に、「東慶寺の墓地には、哲学者などの  
多くの著名な方々が眠っている」という説明書きがあったのを思い出し  
ました。「そのような方々のお墓参りに来る人もたくさんいるんだなあ」と  
思いました。(が、実際に墓地で手を合わせている人はわずかでした)

時刻は11時くらいでした。とてもお天気の良い日でした。  
山門を抜け、境内に入ると、東京・都心には無いものを感じました。

「(うわあ...) 澄んでいる」と一番最初に思いました。

この空気感は東京・都心のどこにも感じられるものではないなと思いました。  
都心にも、皇居や北の丸公園、と、私の自宅近所には素敵な所が  
たくさんありますが、どこどこにも存在しない空気感でした。

爽やか、といえは「そうですが、それよりもっと... 何の混じり気のない、  
とてもきれいな、澄んでいる空気感」でした。「あーずーっとここにいたいな」と  
思いました。

本堂へお参りをし、周囲の建物と植木を眺めながら、お庭のような  
ところをゆっくりと歩きました。植木は、一本一本が異なる種類のものが  
植えられており、大切に、丁寧に、手入れがされていることが分かります。  
眺めると、心が和み、落ち着きます。仏像があったり、小さな墓石の  
ような、何かを誰かが祀っているようなものがあったと思います。そのような所  
には、必ず、一輪の小さなお花が添えられており、小さく咲いているのです。  
主張せず、そと置かれていて、その佇まいに心を打たれます。  
どんな人が生けたのだろうか、と想像しました。

辺りは、本当に、身も心も洗われる空気でした。  
「静寂な空気」「澄んでいる空気」「崇高な空気」です。

建物と植木の間の道が終わり、右手のほうに「松ヶ岡文庫」と刻まれた石碑が見つかりました。生井利幸先生の公式サイトに掲載されていた写真と全く同じです。

松ヶ岡文庫の建物・施設に入るには、事前の手続きが必要なこと、又、そうだけでなく、入口の門の扉が、「激しい門の扉」であることを覚えていました。

最初に目にして思ったことは、「門が開いている！」事でした。立入禁止と書かれた門ですが、体を横にすれば「通れる」と思うくらいの幅30センチメートル程が開いていたのです。

私は、入るつもりでいました。「立入禁止でも...」ですが、一旦立ち止まりました。石碑のそばにある、もっと大きな石碑に何が刻まれているのか知りたかったからです。

文章の終わりに「鈴木大拙」とあるのを見つけましたので、これが、先日、生井先生が仰っていたことなのかを知るためにも、刻まれている文章を読み始めました。鈴木大拙先生が、この石碑に文章を刻み、何かを伝えられているようですが、長年、雨や風にさらされ、刻まれた文字はところどころ、色が落ち、ゆっくりと時間をかけていかなければ、何についての文章なのかはわかりませんでした。

すべてを把握できていないのですが、わかったことは、当時、松ヶ岡文庫はある株式会社との協力を得て建てられたようであり、御礼のお言葉を捧げられていたように思いました。その協力が無ければ、松ヶ岡文庫は建てられなかったといえる、その会社の功績を称えて、御礼の言葉を贈るため、この石碑を建てた、と。

読んでいみると、「立入禁止」の門の中から男性が出てられ、その門を閉められました。

「こゝ、鈴木大拙さんが建てられた松ヶ岡文庫です。今は立入禁止なんですけどね」

と その男性が私に話しかけてこられました。

「立入り、禁止なんですけど...」 「そうですね」

先に、そう言われたら、入れませんでした。その方は、その後、続けて、たくさんのお話をしてくださりました。

この道の右手のほうの道があるでしょ、この先の右にいくと、  
後醍醐天皇の皇女のお墓がありますよ。石があって、それがお墓です。

ここは尼寺だったんですよ。豊臣秀吉の（こゝで姫のお名前を仰ってましたが  
私は付いて行けず）... お孫さんですね、孫がここに入って、国に、  
当時、徳川幕府です、に、日本でたった2つのお寺だけを尼寺とし  
認めさせたんですよ。こゝと、もう一つはね... 群馬の万福寺、（と仰った記憶です）  
その2つだけが、国で認められた尼寺だったんですよ。

この先の竹やぶ、そこを左に折れると岩波文庫の創業者のお墓が  
あります。さらに左に折れると、鈴木大拙さんのお墓があります。

— と、先にたけさんのお話をしてくださり、去って行かれました。

お話を伺っている最中にも、次から次へと訪ねに多くの人々が通り過ぎ  
ましたので、私がお話を伺えたことは、幸運でした。

おき間なく閉められた立入禁止の門を見つめると、もう、近くに寄りません  
でした。気の遠くなるほどの階段を、空気を吸いながら昇り切りたい、  
と思っていた気持ちは、「立入禁止」の言葉にシャットアウトされましたが、  
近くにありそうに見えて、本当は、遠い門でした。

門の向こうを見ますと、階段が見えます。結構、急な階段で、山の上へと、  
奥へと続いているようでした。あの先に、どれだけ遠いのか想像付かない  
けど、松竹園文庫があるんだな、と思いを馳せていました。

昇り始めたら、やっぱりめめたと言って気軽には戻れないような、  
急な階段でした。

結構急な階段を遠くからみると、「銀座書齋」に見えました。  
「同じだ...」と。

鈴木大拙先生が70歳を過ぎてから文庫を建てられ、その後、どのように、  
どのような思いで、どんな風にあの階段を上から文庫へ行かれたのか  
と想像し、思いを巡らせます。

学問の道を行く、英知の道を行く、追究する、というのは、路面に  
あるような学校で勉強することではないと思いました。入口立って自動ドアが  
開いて、気軽に入れるような所で歩く道と、本物の道は違う。地上では  
（ローカルなところでは）学問の道、本当の道は歩めない、と思いました。

墓地では、生井利幸先生が著書「人生に哲学をひとつまみ」によって勉強させていた。知辻哲郎先生と西田幾多郎先生の墓前にて手を合わせました。そして、鈴木大拙先生にも手を合わせてきました。

それから、生井利幸先生が西田幾多郎先生とお話されたことや、ガウタマ・シッターサと語られることを思い出していました。

暫く滞在しましたが、相変わらず、清らかで静寂で澄んだ空気がありました。それを感じながら、最後にもう一度、松ヶ岡文庫と刻まれた碑のところから、遠くにある急な階段を眺め、その山の上にあるであろう階段、文庫を想像しました。

勇気と覚悟を決めなければ「開けられない門の扉は、もう開けることができず、開けようとも思わず」... 階段、文庫は、遠い遠い存在となりました。それだけ、英知や本当のことは、追究していかねば「わからない、遠いところにあるのです。自分の足で、本当に、痛い思いをしなければ、そこにあっても、何もわからないのだ」と思いました。

帰り道は、今までのことが走馬灯のように頭を巡りました。銀座書齋の階段。清掃活動 第1回、2回、3回、と経て、現在まで。そして生井利幸先生は、どのようにして、あの階段を昇ってきたのか、私たちに階段を敷かれたのか。

私は、この日の直前の木曜日に、国際教養塾「神学概論」において、2週続けて講義をいただきました。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神だった。  
言は光になった。光は神から生まれた。光は肉になった。  
光は人間の体になった。」

録音させていた講義を何度も聴きながら、その絵を思い浮かべ、そして、先程見た光景 — 東慶寺、松ヶ岡文庫の碑。立入禁止の門。それが目の前で開かされる。向こうに見える急な階段。森、木、山。 — を見ていました。「何か見えた」と感じました。

でもそれは文章にするのが難しいです。

地上で、勉強と思って行っていた勉強は、ローカルな勉強にすぎなかった。

真人間として、神から教えをそのまま受け、真人間として、より知を磨くため、知を使って、知を追究していくこと、が、人間の行うこと。

社会が近代化して、人間は発展したように見えたけど、高いビルや高精度・高機能の車や、企業の発展で、古代よりも人間や物事が進化したようにある側面では見えるかもしれないけど、ある側面では、古代と変わっていない。古代でも近代でも、人間として存在して以降、すぐに何かに染まったり、欲に走ったりするし、本性は進化せず、変わらずにある。

だけど、本当の人間は、正しいことを追究するように、と生と知を賦与された。人間は人間だけど、地上には、欲が欲を叫んで、毒された人間がたいていいるので、体と心を洗って、本当の人間(真人間)として、正を追究する。

... というようなことが「見えた」と思ったことです。

長いレポートになってしまい、すみません...。  
またあります。

自宅に帰ってきた後、私は勉強机の前方に「エヌオへの途上」の絵を先生から頂いて以降、飾っています。その絵の中に、漂う空気感、森、木々、と、それらが、先ほどの東慶寺と同じでした。

東慶寺に、なぜあのようにも、崇高な空気感があるのか...

私は話しかけてくださった方は、首にタオルを巻いて、墓苑の清掃をされていました。(あとでその光景に遭遇しました)相当量ある木々から落ちてくる落ち葉などを集めて、清掃されていました。

一本一本の植木も、その一本一本の存在が際立っていました。

墓地も境内も、どこでも、手が丁寧に入れられていることもあの崇高な空気感を生み出す一つだと思います。崇高な空気は、自然の中で野放しにして出来るものとは又違ってました。自然だからと放置していてもいいことも実感しました。

銀座書斎を振り返ると、長年、生井利率先生が一人で崇高な空気感を創ってくださっていました... 丁寧に、丁寧に、繊細に...

今、触れさせていただいている弟子の清掃活動は、生井利率先生の崇高な空気感を生み出すために、行う多くの事の中の一つの活動。まだほんのちよとのことしか触れていない、と思いました。

Date

帰定後の自宅では、まだ、松ヶ岡文庫の階段のことを考えていました。  
再度確かめたのは、「先生はあの階段を登ることに意義があると言っているか？」「先生の仰る“勇氣”・“覚悟”は、何に対する勇氣で覚悟なのか？」のような？」でした。

一ツ目の質問には、「そのようなことは言っていない」とわかりました。  
二ツ目は、「勇氣も色々あり、ある意味の勇氣と覚悟かな」と思いました。

先生が仰る、「心と精神の厳格性が問われる厳しい門の扉を開け、  
気の遠くなるほどの長い階段を上がる。そのときに、自分自身を、  
小はいつな何でもよい、周囲に基準を合わせてしまったような、間違った、  
固定観念、雑念、邪念、しからみから、完全に切り離し、  
一個の存在として、一瞬の生の時間を、どのように使わせていただくのか、  
どの道歩くのか、歩かせていただくのか。勉強したら〇〇だから、  
勉強した方がいいから、という陳腐さを捨て、真人間として、  
人間の道を追究させていただく。」について、感じ、考えながら、  
心を決めて、腹を決めて、一段ずつ上がるときに、自分自身の  
真価が問われている...

そのことは、私は、北鎌倉で行わなくていい。自分の昇るべき所、  
東京の銀座で、もう一度、面談を終えて初めて昇る時の初心の心で  
昇れば“いい”のだ...

と思ったとき、山中の階段へ行くための立入禁止の門を通過したのが  
ことは、問題ではなくなりました。

それにしても... 東京の地では感じられない、空気感でした。  
東京のどこにもない、銀座書齋にしかない、空気感でした。

北鎌倉の街もまた良くて、馬と東慶寺の間は徒歩十分ほどの  
近距離ですが、お寺以外にものが無いのです。過剰な装飾も、  
店舗もなく、私の実家、千葉・印旛と同じような零回りの馬構え、  
周辺でした。それで何故か雲泥の差といえるほどの差がありました。  
千葉は疲れたところ、人の手が入らないという感じ。一方、  
北鎌倉は、なるべく、鎌倉時代、江戸時代の空気を汚さないようにし、  
余計な近代を入れないようにして、おと、と求めないようにしている  
感じ。私としては気持ちの方が良かったです。

お出かけするのは久しぶりだったということに歩いて気付きました。  
普段、多くの学習者の皆さんも同じだと思いますが、私自身も、なるべく外出しないと

決めています。加えて今の季節は花粉症なので、積極的な外出は  
あまり控えます。けれど、今回、外出して、「外出してはいけないと  
自分を縛っていた」ことに気が付きました。

最後に、生井利幸先生からの問いについて、振り返りました。

「門は心の貧しい人には小さな門としか見えませんが、  
心の豊かな人、物事の重さ、深さがわかる人には、  
その門は頗る大きく、門に触れることにさえ、躊躇するでしょう。  
門の面前で、まさに、訪問者自身、「日々における生きる姿勢」が  
問われます」 (3月17日付 世界レヴェルへの道「北鎌倉・松岡文庫の空気感」より)

私はどうだったか。小さい門だったか？ 大きかったか？  
私は、小さな門だとも、大きな門だともわからなかったのが、正直なところでは。  
清掃されていた方々のやり取りによって、門に触れることは躊躇しました。が...。  
心が貧しいとわかるのは、今の自分を知られるため、いいことです。

立入禁止と言われた 厳しい門の扉を開けるのは、  
銀座書斎への面談の申し込み、に置き換えることができるかな、と思いました。

自ら入れないで、先生との面談の末、先生から合格と言渡された者  
だけに、門が開かれます。

立入禁止、としているのは、心は決めているか？ 覚悟は？ と  
「一個の存在」に問われているのですね。「それでも本当に、  
人類共通言語を習得することを通して、自分という人間存在を  
磨くつもりか？」と。

そして、門を開けていただいた後は、急な階段を自分の足で  
昇ります。迷いはなく、上にかかるのか。それとも何か重たいものを  
持ちながら、昇ろうとしているから、一段が重いのか。日常生活の延長や  
「アフターファイブ」の習い事、という感覚で、捨たれな重たいものを持っていると、  
階段の一段がしんどいです。銀座書斎では、社会的地位も  
関係がなくなる。それらの不要なものを地上に置いてきた/放棄  
してきたか。真の人間存在としての価値を学びを通じて高めるのか。  
と、長い階段を上がる過程で問われているのですね。

深い意味があって、重みのある、一段だということに、やはり気付かずに  
来てしまっていたと思いました。

また、北鎌倉へ出向くことがあると思います。

今は、目の前にある、「銀座書斎」という、非常に思われた地に存在する学問所の階段を、大切に昇ります。何度も昇りたいです。何度も昇れたら、幸せです。

このたび、感じたことを書き留めたい、けど、言葉にならない...と  
思っていたところへ、レポート作成の機会を賜与していただき、  
文字にすることができました。

このたびの機会を賜与いただきまして、ありがとうございます。

以上